

# つながりと発展

## 見徳寺と照範

### 匠瑳探訪

— 53 —

図書館主催の歴史ウォークで成田山新勝寺（成田市）を訪ねました。新勝寺の本尊不動明王は、関東三大不動として古くから信仰を集め、全国的によく知られています。

この成田のお不動さんが一躍脚光を浴びるようになったのは、およそ300年前の江戸時代中期からです。1700（元禄13）年に新勝寺の住職となった照範は、1703年に江戸深川（現在の東京都江東区）永代寺で初めて本尊不動明王の出開帳（＝出張の

御開帳）を行いました。照範は佐倉藩主稲葉氏らの信頼と援助を得て、深川出開帳の時に本尊を江戸城中に入れ、5代將軍綱吉の母・桂昌院の参拝を受けました。

この照範と八日市場村見徳寺住職との間には深いつながりがあったようで、このことが同寺の歴史に大きな影響を与えたようです。

初めての江戸出開帳の前年・1702年9月14日から23日までの10日間、見徳寺境内で巡行出開帳があったとき

れます。新勝寺本堂が建立され、その費用を得るために照範が東総地域の諸寺院で開帳を行ったのかもしれない。見徳寺では、1720（享保5）年に現存も境内に鎮

座する銅造・地藏菩薩像を完成させました。同年11月23日から5日間、開眼供養という儀式が近隣寺院から住職を招いて行われましたが、成田山の照範も参加しています。

この像の造立費用は、八日市場村の古作氏をはじめとする同村の人たちや富谷、籠部田、米倉、横須賀、宮本、平木、椿村など近隣の村びと、江戸町人からの寄付があてられました。

新勝寺が照範の代に飛躍的な発展を遂げた時期に、見徳寺も新勝寺と同じく本寺を京都嵯峨大覚寺に変えたり、檀林格の取得など寺格式の向上が図られた背景には、照範の助力があったのでしょう。

新勝寺の出開帳は江戸時代に12回行われ、うち1回は1809（文化6）年に見徳寺で行われました。これは同寺本堂が2年前に完成し、その費用捻出のためと考えられます。

「大浦ごぼう」が佐倉藩主や諸大名に献上されたのが照範の住職時のこととされ、これも新勝寺と見徳寺との関係の深さの表れかもしれません。

■ 八日市場図書館 ☎ 3746



見徳寺境内にある地藏菩薩像